

Just Now

小中連携の英語教育で身につけるべき学力とは

渡邊寛治 Watanabe Kanji
(国立教育政策研究所)

本稿では「今後の小学校における英語活動はどうあるべきか」「中学校との連携はどうするのか」、小中連携の立場から今後の英語教育の在り方について考察する。

小学校の英語活動で身につく学力とは

小学校における英語活動で児童は「何を、どの程度」身につけるのであろうか。本稿では、筆者が最近中長期間にわたり指導にあたった新宿区立戸塚第一小学校と多摩市立竜ヶ峰小学校の研究成果（いずれも、月3～4回余の英語活動）を紹介する。ALTとの英語活動がもたらした子どもの変容はおおむね次のとおりであった。

- ① 外国の人と接する時、最初はどの子どもも身構えていたが、しだいに臆することなく話すようになっていった。ALTとのふれあいは子どもたちを活気づけた。
- ② 消極的だった子どもが自ら発言するなど、英語活動以外のときにも物事に積極的に取り組むようになった。異文化体験活動のお陰で全体に子どもたちの発言が活発になった。
- ③ ALTとのコミュニケーション活動でALTにほめられたり、通じる喜びを味わうことで自信を得るようになった。寡黙な子や外国人労働者の子ども、さらには、自閉症の子どもがALTとのコミュニケーションを楽しむことで明るく変容した。
- ④ ALTや外国の子どもたちを交えた異文化交流を通して、子どもたちの外国への興味・関心が高まった。世界の人々と積極的に関わろうとする態度が芽生えた。
- ⑤ 3～4年間、ALTとの英語活動を体験した子ども

(高学年)の中には、もっと英語でコミュニケーションをとりたい、もっと発信したいと願う子どもが増えた。そのような子は英語が聞き取れる喜びと実際に外国の人との会話で通じる喜びを得たことをその理由に挙げている。その聞き取りについては大人が想像する以上に子どもには聞き取る力がある。

以上のことから、小学校の英語活動を通して児童が身につける学力はおおむね次のとおりであると言えよう。

まず、資質面では①～⑤の下線部が示すように子どもの関心・意欲における「積極性・主体性」と言語・文化における「広い視野・相互理解への行動・相互信頼への態度・思いやり・協調性」などが培われる。とりわけ、「積極性や主体性、広い視野など」は、子どもの「自己の確立」には欠かせぬ資質であり、現代の教育課題である「生きる力」の源泉ともいべきものである。これらは、いずれも国際理解教育の観点から解釈すべき成果である。とかく机上の学習になりがちな教科学習と異なり、小学校の英語活動は異文化の人々との生のコミュニケーションを重視した体験活動ゆえに、児童にとっても教師にとってもこれまでにない人生体験をしていると言えよう。

次に、能力面では③や⑤が示すように、子どもはALTとのコミュニケーションで通じる喜びを味わうことで動機づけを高める。そこでは、実際に英語を理解し、英語でのコミュニケーションを楽しんでいる。子どもには、大人が想像する以上に聞き取り能力がある。一方、発信面では中学校の英語学習のように言語のルールに関する体系的学習をしてい

るわけではないから、自分で言いたいことの文を自分で生成し伝えることはできないかもしれない。しかし、言語・非言語を通してALT等とコミュニケーションをすることの楽しさと大切さを身につけていく。子どもは、英語の勉強ではなく、ALT等との実際の体験活動を通して英語による実践的コミュニケーション能力の基礎（例えば、臆することなく話したり、ピンポンのような英語特有のコミュニケーションのしかた）を身につけていくのである。

小中連携の英語教育で 身につけてほしい学力とは

中学校の外国語の教科目標は、学習指導要領によれば「外国語を通じて、①言語や文化に対する理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、③聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」こととされている（番号の付記は筆者）。

このうち、小学校の英語活動ではどの程度のこと期待できるであろうか。そのことがわかれば「小学校では何を、また、中学校では何を身につけるべき」かが明らかになる。まず、①の言語や文化に対する理解については、おそらく違いを違いとして理解する基礎力は身につくであろう。

次に、②の積極性については、最も期待してよいのではなかろうか。これまでの実際研究で最も成果を挙げている部分だからである。②の資質の育みは、個人差が激しく、時間を要する。したがって、スポンジのように頭の柔らかい小学校段階より時間をかけて育めば、ほとんどの日本人は臆することなく外国人と堂々とコミュニケーションを図ることができるようになるであろう。「沈黙は金なり」「以心伝心」という文化を持つ日本である。それ故、これまでの日本の中高の英語教育で生まれ難かった資質の基礎学力が、小中連携の英語教育で育まれるとなればこの上ないことである。そのためにも、日本の小学校英語教育は言語のルールを学ぶことを目標とした英語学習であってはならない。なぜなら、早くから英語嫌いを作るだけだからである。

問題は③の「理解と表現の能力」である。まず、中学校外国語科の理解の能力に関する評価の趣旨は「初歩的な外国語を聞いたり、読んだりして、話し手や書き手の意向や具体的な内容など相手が伝えようとすることを理解する」となっている。また、「聞くこと」の評価規準は「初歩的な英語の情報を正しく聞き取ることができる」「初歩的な英語を、場面や状況に応じて適切に聞くことができる」である。

小学校の英語活動では、これまでの研究成果から評価の趣旨についてはおそらく下線部を除いておおむね可能であろう。また、評価規準についても下線部の解釈が微妙であるが、細部にわたって正確かつ適切に理解することは困難でも、相手の伝えたいことをおおむね理解することはこれまでの実験で明らかになっている。したがって、中学校では下線部を意識しながらその基礎学力がしっかり見につくように指導することが大切である。

次に、中学校外国語科の表現の能力に関する評価の趣旨は「初歩的な外国語を用いて、自分の考えや気持ちなど伝えたいことを話したり、書いたりして表現する」となっている。また、「話すこと」の評価規準は「初歩的な英語を用いて、自分の考えや気持ちなどを正しく話すことができる」「初歩的な英語を用いて、場面や相手に応じて適切に話すことができる」である。

小学校の英語活動では、評価の趣旨については下線部を除けばおおむね可能である。「自分の考えを話す」についても調べ学習の成果等を自分の考えとして英語で話したりすることも部分的ではあるができることが明らかになっている。また、小学校の英語活動では、ALTとの体験活動が多いところでは、英語特有のピンポンのようなコミュニケーションのやりとりを重視した活動を行っているところもある。これらは日本の言語文化にはないコミュニケーション形態である。したがって、たとえ正しい発音でしかも適切に表現できなくても、コミュニケーションすることの楽しさと大切さを身につけさせたいものである。中学校ではそのことを踏まえて実践的コミュニケーション能力の基礎を培うことが大切である。